

# アマ・ヤマ・シマ・イマにおける 〈マ〉と〈ナカマ〉との交通

—— 離島の時間・空間を考える

菅田正昭

日本文化の根源をなすのはマ(間)の概念である。アマ(天・海)に囲まれたシマ(島)は、マを集約的に体现する存在であり、そのマこそがシマをシマたらしめてきたが、いまそのマは空間的にも時間的にもかなり狭められてきている。固有のシマ文化を再生するため、「間合い」の復権という視点から島の振興を考える。

## 空間と時間の 両義を持つマ(間)

日本文化の根源を一言で表わすコトバがあるとすれば、〈間〉であると思われる。伝統芸能(音楽も含める)などでは、とくに〈間合い〉というものを大切にしている。なぜなら、この〈間〉が合わないといふ、「間違」ったり「間延び」したり「間抜け」になってしまうからである。芸能ばかりでなく、絵画や技術も含めて、伝統的な日本文化を構成する要素として

〈間〉はひじょうに重要な位置を占めている。日本独自の美意識をあらわす語としての「いき(粋)」の構造を明らかにした哲学者、九鬼周造(二八八八―一九四二)の『「いき」の構造』(昭和五年)も、突き詰めれば、空間と時間にたいする日本人の「間」の感覚を分析したものに他ならない。

この〈マ〉が付いた語として、アマ(天・海)、ヤマ(山)、シマ(島・織)、イマ(今・居間)などがある。南北に長く連なる我等が弧状列島は、もちろん、アマ・ヤマ・シマを抜きにして語ることはできない。この場合の〈マ〉は「空間」

性を意味しているが、それは我々がいる〈場〉でもある。そして、この〈場〉という觀念から「時間」性の〈マ〉の義も生じてくる。というよりも、その〈場〉と、その外側とのサカイ(境・界)が〈マ〉(間)となる。ただし、〈間〉という感覚は、あるときは拡大したり延びたり、あるいは逆に縮んだり、要するに伸縮自在の概念である。

アマの〈ア〉は、遠くのもの、大きく開いたものを対象として意識したとき発せられる語である。そこに〈マ〉が付くことによって、どちらも大きく開いた空間性を有してくる。天と海が同じアマという音韻を持ち、語源が同じというのも、日本が海に囲まれている、という風土から発したものにちがいない。天と海との茫漠たるサカイの向こう側に、精神的に信仰的な原郷を想定した我等が祖先に相応しい感情だ。

ヤマの〈ヤ〉は、「たくさんの」という意を持っている。すなわち、ヤマは重なり合った空間の義である。ヤマの、それぞれの〈マ〉自体は小さいかもしれないが、総体的にみれば、アマと接する部分の表面積は大きいのである。〈異界〉への入口としての山岳はまさに、それである。ちなみに、アイヌ語のヤは「水の湧き出る所」の義であり、ヤト谷戸・ヤチ谷地の地名もこのヤである。

シマの〈シ〉は、「しぼんだ」とか、あるいは「じっとして動かさない」という意味合いを持っている。シマに限定

された空間性や孤立性のイメージが付きまとうのも、そこから発するのもかもしれない。そして、とくに注目しなければならぬのは、シマ(島)が天と海という一つの〈アマ〉に囲まれた空間である、という点である。言い換えれば、天と海とのサカイに位置しているわけである。島が〈聖空間〉化しやすいのは、そのためかもしれない。

イマ(今)という語にも〈マ〉が含まれているが、〈場〉としての〈間〉に〈居〉ることが〈今〉という觀念を生むすなわち、今、居る場としての〈現在〉という感覚が時間概念を作り出したわけである。アマ・ヤマ・シマのマが空間性のコトバであるのにたいし、このイマのマは時間の義だが、もちろん〈間〉には空間と時間の両義がある。

### 人間と自然との 結合により生じたナカマ(仲間)

ところで、神道には「中今」という概念がある。『しんごくにほん続日本紀』には八世紀ごろの国文体で記された詔勅を載せた「せん宣命」が多く収録されているが、そこに登場してくる語である。その『宣命』の筆頭に置かれている「くわんてん文武天皇御位に即つきたまふときの宣命」(六九七年)の中に「たか高天原に事始めて、とほつすめみ遠天皇祖の御世、中今に至るまで……」と見えるのを嚆矢とする。本来は、時の天皇陛下の御世を最良のものとして言祝ことほぐだけの意味しかなかったが、やがて神代

(古代)から今(現在)へ至る時空の中で、神々や天皇と共に、自己がその歴史過程へ直接参加できる(現在)という時空間を最重視する、という政治哲学へと変化した。『広辞苑』は「過去と未来との真ん中の今。遠い無限の過去から遠い未来に至る間としての現在。現在を賛美している語」と紹介している。

当然のことながら、アマ・ヤマ・シマの(マ)は、遠い過去から遙かな未来へ繋いでいく現在という意味での(間)である。すなわち、その(マ)とは、過去・現在・未来が同一の時空に存在している(間)である。「宣命」とそこから発展してきた天皇制の「中今」観とは違うかも知れないが、とくに、シマの場合は「中今」の原義を理想形として保持してきたはずである。そのことは(ナカ(中)イマ(今))と音韻が似ているナカマ(中・間、仲・間)という語について考察してみると、よく理解できる。

日本の芸術・文化の再発見を試みてきた倫理学者の和辻哲郎(一八八九―一九六〇)によれば、「倫理学」の「倫」という字は「仲間」を意味している。たしかに、『広辞苑』にも「①人として守るべきみち。道理。②仲間。たぐい」とある。要するに、ナカマとは、空間と時間としての(間)を共にしている人びとに生じた連帯のことである。

ここで、(ナカ(中)仲(マ)間)という語を、もう少し掘り下げてみよう。ナカという語義を考えると、ナはおそ

らく「名」である。一般的に、事物は名が与えられることよって、初めて人びとはそれを認識の対象として共有することができると言える。これがナル(成る)である。あるいは、ナを「土地・大地」を意味する語と考えてもよい。ナルの重要な語義の「生る」は、この大地性から生じてくる。一方、ナカのカはドコ・ソコ・ココのコや、あるいはイヅクのコと同じく、場所を示すカ(処)である。すなわち、ナカとは、我々が目近に、そして身近に感じるナカ(中)＝ウチ(内)側の意識を持つて共有することが可能な場のことである。もちろん、ナカマはそのナカに「間」が付いたものである。

いいかえれば、人間と自然が空間的にも時間的にも結合したところに(仲間)意識が生じてくる。したがって、ナカマを、自然が織り成す生態系と人間との交流の中の、一種の生命圏から発する構造と捉えることができる。シマは島共同体というコトバに象徴されるように、このナカマが最も機能している(マ)といえるかもしれない。

#### 外部との交通・交流で

#### マ(間)をツ(詰)めるマツリ(祭・政)

アマ・ヤマ・シマ・イマ、そしてナカマに共通するマ(間)は、単なる空間や時間のことではない。人間という社会性を持った(間)が介在することで、(マ)に働きが

生じてくる。それが典型的に現れてくるのがマツリである。もちろん、マツリには祭祀としてのマツリゴト（祭事）と、政治としてのマツリゴト（政事）の二つがある。しかし、祭政一致の時代には、神の意思を人びとに伝え、神の意向を反映させることで統治するのがマツリゴトであった。すなわち、祭祀と政治が一体化していたわけである。

最初は（祭事）のほうが（政事）よりも優位に立っていたが、いつしか、その関係が逆転し、古代の政教分離が行われていく。邪馬台国の卑弥乎に象徴されるように、祭祀は女性（姫）が担当し、その憑り懸<sup>よ</sup>つてきた神を審神<sup>さびかみ</sup>し、さらに、その神懸りのとき発せられるコトバは一般的に理解しにくい傾向にあったから、それをわかりやすく「翻訳」して生活の中に活かすのが政治の役目であり、こちらは男性（彦）が担当していたわけである。これが祭政一致の姫彦制である。いうならば、古代の政教分離は男性優位の確立であった。そして、祭祀じたいがやがて儀式化していく。マツリの語源は「マツ（待つ）リ」である。神の出現をひたすら「待つ」のが（祭り）の本義である。その「待つ」の語源は「間ツ」である。ツには「詰る」の語義もあるが、相手との時間を詰めるのが「待つ」ことである。すなわち、マツリとは神代に神々が出現したときのことを、時空の「間」を詰めることによって初期化し、「今」に再現することであった。これがほんとうの〈中今〉である。詩人・思

想家の吉本隆明（一九二四〜）的にいえば、共同幻想・共同幻視・共同幻聴の場を演出することが（祭り）である。

一方の政治的マツリは、人間（仲間）関係や、事物との「あいだ」に発生したギクシヤクとした〈間〉の配列を組み替えることであつた。こうして、人間と人間、人間と自然、人間と事物、自然と事物などとの「間」を調整するところがマツリゴト（政事）となつた。すなわち、政策の実現を「待つ」ことによって「間」を「ツ（詰）」めてもらうのが政治的マツリである。

いつ訪れるのか判らない神を「待つ」のがマツリ（祭り）の本義だが、儀礼としての〈祭り〉は神を待つときの接し方の表現の形式である。「待つ」のは時間の経過に身をゆだねることだが、効果的に「待つ」方法として、神々に早く来訪してもらうための努力をしなければならない。人間という存在は、自己とその外部との交流・交通（コミュニケーション）抜きに生きていくことができないが、その交流・交通の基底にあるのが「間合い」である。その「間」を詰めることが祭と政のマツリである。

### マ（間）を詰める交通機関としての フネ（船・舟）

シマ（島）は、天と海という二つのアマに包まれ、さらに、それ自体が海の上に突き出たヤマであるという点で、

「間」を集約的に体现している。鳥との往来（交通）を考えると、かつては「船待ち」が余儀なくされた。その言葉が象徴するように、「待つ」ということが渡鳥の条件だった。離島振興はその「待つ」ことを短縮することを目的として、いろいろな形で「間」を詰めてきたわけである。

その「間」を詰める交通機関として、フネ（船・舟）がある。道の延長としての船があるわけだが、フネとは本来は容器（＝槽）のことである。すなわち、運搬用の入れ物のことである。マツリがカミガミと人間との交通であったように、二つのアマに包まれたシマ（島）との交通も一種のマツリゴトなのである。

記紀神話を眺めると、葦船、鳥之石楠船神（天鳥船）あめのいかりふね、天磐櫂船あめのかきふね、天羅摩船あめのらまふね、无間勝間之小船まなしかつまのふね（無目籠・無目堅間あめのりかま）、浮宝、熊野諸手船（天之鵠船・天之鳥船）、天磐船、喪船、枯野から；等々の、船や船の神が登場する。その中でも注目すべきは、天鳥船である。この天の鳥船の神は、天孫降臨に先立って葦原中つ国の鎮撫のため高天原から派遣された神だが、その名が示すように、天翔る鳥と海駆ける（疾走する）船という二重のイメージから成り立っている。しかも、その別名が鳥之石楠船・天磐櫂船であるように、「鳥のように天翔け磐のように堅く樟腦の防虫効果で腐敗しにくいクスノキ」で作られた船であった。実際、外海孤立型の離島の高台から眺めると、鳥へやって来る船は天と海と茫漠

たる水平線の彼方から飛来する鳥のようにも見えてくるのである。

もう三〇年以上も昔のことだが、テレビを見ると、西ニューギニアの海辺の民族では、死者が生前、自分が漁に使っていたカヌー（刳舟くわふね＝丸木舟）を、鳥のように彩色して棺桶とし、それを集落が見下ろせる丘の木の上に安置して風葬にする、という習俗を紹介していた。まさに、死者の霊を乗せて天空へ飛び出そうとしている天鳥船である。わが国でも高貴な人の遺骸の納棺をオフネイリ（御舟入り）というが、棺桶はフネとも呼ばれているのである。そのフネ（お棺）のことをヒツギともいうが、ヒツギには「日嗣・霊継ぎ・火継ぎ」の義もある。霊魂を乗せて「あの世」（常世やニライカナイを含む異界）と「この世」との間を往来するのも船だったのである。

### マ（間）が詰められて逃げ道を失った 現代の離島

定期船の入港が運が良くて月一〜二回程度のころの青ヶ島では、「浜見舞い」という風習があった。何処に、こんな御馳走があったのかしら、と思うほどの料理を重箱に詰めて港へ降り、往く人と来た人が舢から降ろされたばかりの食品や、港で釣ったばかりの魚を刺身にして鳥酎を酌み交わし饗宴を開くのである。まさに、マレビト（客人）を

迎えての祝祭なのである。滅多に来ない定期船という名の不定期船は、宝を満載して常世から来航する宝船なのである。このとき、国地（トウキョウ）と島地は一瞬、時空を越えて「間」が詰るのである。もちろん、長く「待つ」た結果としての（祭り）なのである。すなわち、天鳥船神を迎えての（祭り）が「浜見舞い」なのである。

だが、現在の島々は逃げ道を失っている。なぜなら、空間的にも時間的にも、最早（祭り）ではないのに、常時、「間」が詰められているからである。「間」が詰まるのは一瞬の出来事であり、日常的なことではないのだ。祭りは非日常に属する出来事なのである。

かつて青ヶ島では年賀状が三月になって届くことは珍しい事ではなかった。少なくとも村営連絡船「あおがしま丸」が就航する以前の、昭和四七年八月まではそうだった。あるいは、東京都から送られてくる書類が何時ごろ届くのか、ということはお天気まかせであり、まったく判らなかつた。そのことで生ずる事務停滞の可能性を除去するために設置されたのが、かつて東京都八丈支庁内にあつた青ヶ島村の分室であつた。しかし、青ヶ島で直接、やり取りしなければならぬ文書もあつた。

電話も昭和五八年七月二九日、加入電話一一一台、公衆電話五台の運用が開始されるまで、公衆電話二本（役場と郵便局が各一台）と警察電話（駐在所一台）の計三本（外に利

島・御蔵島と回線共有の東京都行政無線）があるだけだったから、そういう文書は届いていないと、とほけることもできたのである。「二週間前に速達で送っているから、もう届いているはずだ」と言われても、村営連絡船の時代になつても、運が悪いと、実際に届いていなかったのである。すなわち、逃げ道があつたのである。

ところが、現在はフアクシミリも携帯も、インターネットもあるから、そうした逃げ場がない。日本中が「リアル・タイム」になつていたのである。つまり、空間的にも時間的にも、通信という点での格差はほとんど消滅しているわけである。「間」が詰まって息苦しくなつているのである。

伝染性の病気も、そうである。かつて流感（流行性感冒）インフルエンザ）は八丈島までやってきても、青ヶ島まではなかなか来ることができなかった。たまたま東京へ出かけた住民が流感に罹つて治癒して戻れば、羨ましがられたものである。ときどき半年以上の流行遅れで島内で蔓延することがあつたが、好い薬がなかつたのに、よく死者が出なかつたものである。

沖繩に「美ら瘡ちんが」という語がある。いわゆる梅毒のことだが、それがうつされるということは、ヤマトウンチュとカ支那人との接触があつたことの証拠であり、それゆえに「美ら瘡」と呼ばれたのである。マレピトがもたらした二

ライカナイからの、舶来の病気だったのである。「間」を詰められたときに生じた聖痕だったのである。

## 離島独自のマ(間)を生かした 対馬藩主替え玉事件

離島がその孤絶性を最大限に活用した事件として、対馬藩宗家の藩主「偽装」がある。すなわち、宗家第三二代の義功が「替え玉」だったという事件である。中川延良(二七一九〜九六)『楽郊紀聞(対馬夜話1、2)』平凡社東洋文庫、昭和五二年)の鈴木棠三の校注によれば、次のような事件である。

「義功は義暢よしながの六男。実は四男猪三郎いのとさぶろうが安永七年(二七七八)に襲封よしかつしたが、天明五年(二七八五)十五歳を以て在国よしかつのまま天死ようしした。これを高源院大勇玉光大童子という。将

すがたまさあき  
菅田正昭



昭和20年東京生まれ。学習院大学法学部卒業。同46年から49年まで東京都青ヶ島村役場職員、平成2年から5年にかけて同村助役を務める。主著に『日本の島事典』(三交社)、『アマとオウー弧状列島をつらぬく日本的靈性』『隠れたる日本靈性史』(たちばな出版)、『古代技芸神の足跡と古社』(新人物往来社)、『第三の目』(学習研究社)ほか多数。現在、自身のホームページ「でいらぼん通信」で独自のシマ論を展開している。日本民俗学会会員。

軍拜謁以前に没したので、公辺を取り繕うため、州中上下心を合わせて弟(六男)の富寿とみじゅを替え玉とし、改めて猪三郎の病気全快を触れ、富寿を病死とした上で、替え玉の富寿を義功として最後まで押し通した。富寿の義功は文化十年(一八一三)没、享年四十一。法号浄元院殿明円宗秩大居士。在職中、文運がさかんで、復興期の觀を呈した。」(1巻の一八ページ)

その事実が幕府に知られば、おそらく、藩主や城代家老は切腹の上、御家のお取り潰しは免れなかったにちがいない。藩士の結束もあつたであろうが、これが国地の藩だったら「替え玉」を押し通すことはできなかったかもしれない。離島の孤立性を最大限に活用した事件だったと考えられる。ただし、徳川幕府の鎖国令の中で、対馬藩が韓国に出先機関を持ち、外交を行っていたという特殊事情を考

慮しての、幕閣の一部が見て見ない（聞いて聞かなかった）ふりをしてきた可能性があるかもしれない。ちなみに、対馬藩は徳川綱吉（一六八〇～一七〇九在任）の「生類憐れみの令」のとき、猪退治を行って対馬全島から猪を一頭残らず駆逐している。

離島の空間と時間を逆手に取っての、「間」合いを活用してのウルトラCである。どこの離島でもできるわけではないが、離島にはその離島独自の空間性と時間の流れがある。今はそうでもないかもしれないが、離島では概して時間はずつたりと流れるのである。シマという「間」は広く開いていたのである。

### 「間合い」の復権で 離島の振興を捉え直す

今やシマという〈マ〉の間合いは急速に狭まりつつある。時間もそうだし、空間も昔と比べると詰まってきたといえよう。しかし、〈マ〉（間）は文化のバロメーターなのである。詰めるだけではなく、「待つ」時間も大切なのである。

ある。かつて離島の隔絶性を除去することが離島振興法（旧）の使命だったが、今はその島の固有性・文化性が問われる時代である。

ところが、高齢化と人口の減少という状況の中で、島における人間や、島の仲間の「間」が逆に拡大している。日本文化の基底にあるシマ文化が危うくなってきているのである。新しい視点からの「間」の再生が問われているのではないかとおもう。

「待つ」マツリ（祭り）の〈マ〉（間）と、「間」を「詰める」マツリ（祭り）とのあいだの葛藤が日本文化の「間合い」を創出してきた。空間と時間の操作を「祭り」として行ってきたのである。その時間と空間を体現してきたのがシマである。抽象的な物言いになってしまったが、中今の離島振興を「間合い」の日本文化の復権という視座から捉えなおす必要性を感じている。「島地」と「国地」の〈マ〉をゼロにするのではなく、シマの靈性を発揚させるための、新しい〈マ〉の創出が必要だ。